

松山城にみる石垣構築技術

楠 寛輝

1. はじめに

石川県金沢城調査研究所では、金沢城最大の魅力である石垣について、その学術的な位置づけを全国的な視野で行うため、文献班と考古班を設け、石垣構築技術が特に進展した文禄・慶長期から元和・寛永期にかけてを中心に、全国の近世城郭の石垣との比較研究を続けている。その中で、筆者は考古班の一員として四国の石垣について調査する機会を得たため、今回はそれに伴う最初の報告として、筆者のフィールドとする松山城の石垣の特徴と変遷について所見を述べ、金沢城の石垣との比較のための基礎作業を行うこととした。

2. 松山城の概要

(1) 歴史

松山城は、賤ヶ岳七本槍の一人で、関ヶ原の戦いでの功を受けて伊予国20万石の大名となった加藤嘉明が、慶長7（1602）年、築城に着手したことに始まる。その完成は、寛永4（1627）年、完成間近となっていた松山城を残し、加藤嘉明が40万石の所領を得て会津に転封した後、代わって蒲生忠知が20万石で入封してからと考えられている。築城には実に約26年もの歳月を要したことになる。ただし、その間に、加藤嘉明は大坂冬・夏の陣に出陣し（ただし、冬の陣は江戸城の留守居役を務め、息子の明成が出陣）、名古屋城、徳川大坂城（3期のうち第1・2期）等の天下普請にも加わっており、これらが時間的・技術的な面で自らの居城である松山城の築城に大きく影響していることは、考慮しておく必要があるだろう。

なお、蒲生忠知には嗣子がなく、寛永11（1634）年に忠知病没後に蒲生家は断絶し、一時松山城は大洲藩主加藤泰興らの預かりとなるが、翌寛永12（1635）年、徳川家康の異父兄弟である松平定勝の次男、松平定行が15万石で入封した。それ以降、明治時代を迎えるまで、松山城は松平家の居城として機能した。その間、初代定行が入封直後に五重だった天守を三重に、また4代目定直が、それまで二之丸にあった御殿を三之丸（四国がんセンター跡地）に移すなどの改築が行われた。また、天守が天明4（1784）年に落雷で消失し、嘉永5（1852）年に再建されるなど、建造物、石垣を問わず多くの天災による被害の修理等も幾度となく行われたが、その具体的な内容については不明な点が多い（表1）。

(2) 構造

松山城は、松山平野の中心に所在する独立丘陵勝山の山頂に連立式天守（本壇）を伴う本丸、傾斜の比較的緩い南西山麓に二之丸（現在の二之丸史跡庭園）、三之丸（現在の堀之内公園）が配されており、これら全体が南北の登り石垣（北登り石垣は一部を残して現存せず）と堀（一部は埋め立てられている）で囲まれている。また、傾斜の急な北と東の山麓にも、それぞれ重臣の居住した大規模な北郭（現存せず）と東郭（現在の東雲学園）が配されており、防御性・実用性をとても重視していたことが分かる。この防御性・実用性重視の姿勢は、本丸の周囲が10mを超える高石垣で囲われているだけでなく、出入の鎬角を連続させ、地形的制約と横矢掛という戦略性を上手く両立させていることや、二之丸や本丸周辺、本壇内部の登城道が執拗ほど連続して屈曲するだけでなく、これらと見事に対応して多数の門や櫓等の建造物群が配置されていること、城内の石垣にほぼ全くとってよいほど鏡積

年 号	事 象
	(中世には「味酒山城」との記述が見られるものの詳細は不明)
天正13 (1585) 年	河野氏滅亡、小早川隆景、福島正則らによる領有となる
文禄元 (1592) 年 ～慶長3 (1598) 年	文禄・慶長の役 ※文禄2 (1593) 年、加藤嘉明ら安骨浦城築城
慶長5 (1600) 年	関ヶ原の戦い(加藤嘉明は東軍として参戦、伊予では刈屋口の戦い) 加藤嘉明の領有となる
慶長7 (1602) 年	加藤嘉明築城工事に着手
慶長8 (1603) 年	加藤嘉明入城 (これより「松山」の名称が用いられるようになる)
慶長15 (1610) 年	加藤嘉明名古屋城普請に参加
慶長19 (1614) 年	大坂冬の陣 (加藤嘉明江戸城留守居役) [大地震]
元和元 (1615) 年	大坂夏の陣 (加藤嘉明徳川方として参戦、豊臣家滅亡) 一国一城令、武家所法度等の発布
元和6 (1620) 年	加藤嘉明徳川大坂城普請に参加 (1回目)
寛永元 (1624) 年	加藤嘉明徳川大坂城普請に参加 (2回目)
寛永2 (1625) 年	[地震]
寛永4 (1627) 年	加藤嘉明会津に転封、蒲生忠知が入封 ※築城工事はこの頃、蒲生の代になって完成
寛永11 (1634) 年	蒲生家が断絶し、大洲藩主加藤泰興らの預かりとなる
寛永12 (1635) 年	松平定行 (初代) が入封
寛永16 (1639) 年	松平定行天守を五重から三重に改めるなど大規模な改修工事に着手 ※工事完成は寛永19 (1642) 年頃 松平定行江戸城本丸再建普請に参加
慶安2 (1649) 年	[地震]、松山城郭破損
貞享2 (1685) 年	[地震]、松山城郭破損
貞享4 (1687) 年	松平定直 (4代) 三之丸御殿が完成し、御殿を二之丸から移す
元禄7 (1694) 年	松平定直江戸城西之丸普請に参加、西之丸が完成
宝永4 (1707) 年	[大風雨]と[大地震]、松山城郭破損
天明4 (1784) 年	[落雷]により天守等焼失
文政3 (1820) 年	松平定通 (11代) 天守再建工事に着手するものの頓挫
嘉永元 (1848) 年	松平定毅 (後に勝善、12代) 天守再建工事に着手
嘉永5 (1852) 年	天守再建工事完成
安政元 (1854) 年	天守再建工事落成式 [大地震]

表1 松山城年表 (城普請及び天災等を中心に)

等の実用性よりも威信性を重視した積みが見られないこと等からも明らかである。このように、松山城は、いわゆる関ヶ原の戦い直後の時代の緊張感を今によく伝えており、加藤期以降、基本的な縄張りの変更はほとんどないものと考えられている。また、東郭のさらに東、城下町の東端には、南北に外堀（埋め立てられている）が配され、総構を構成していた（写真1・2、図1・2）。

このうち、本丸や二之丸を含む勝山の大部分や、三之丸、それを囲む堀の約62haが国指定史跡となっており、石垣はその最大の魅力となっている。また、勝山を包む樹叢は県指定天然記念物となっており、天守を含む21棟の建造物が重要文化財となっている。なお、この嘉永5（1852）年に再建された天守は、近世城郭で現存している全国12棟の天守の中で、最も新しいものである。



写真1 松山城本壇（南東より）



写真2 松山城全景（上が北）

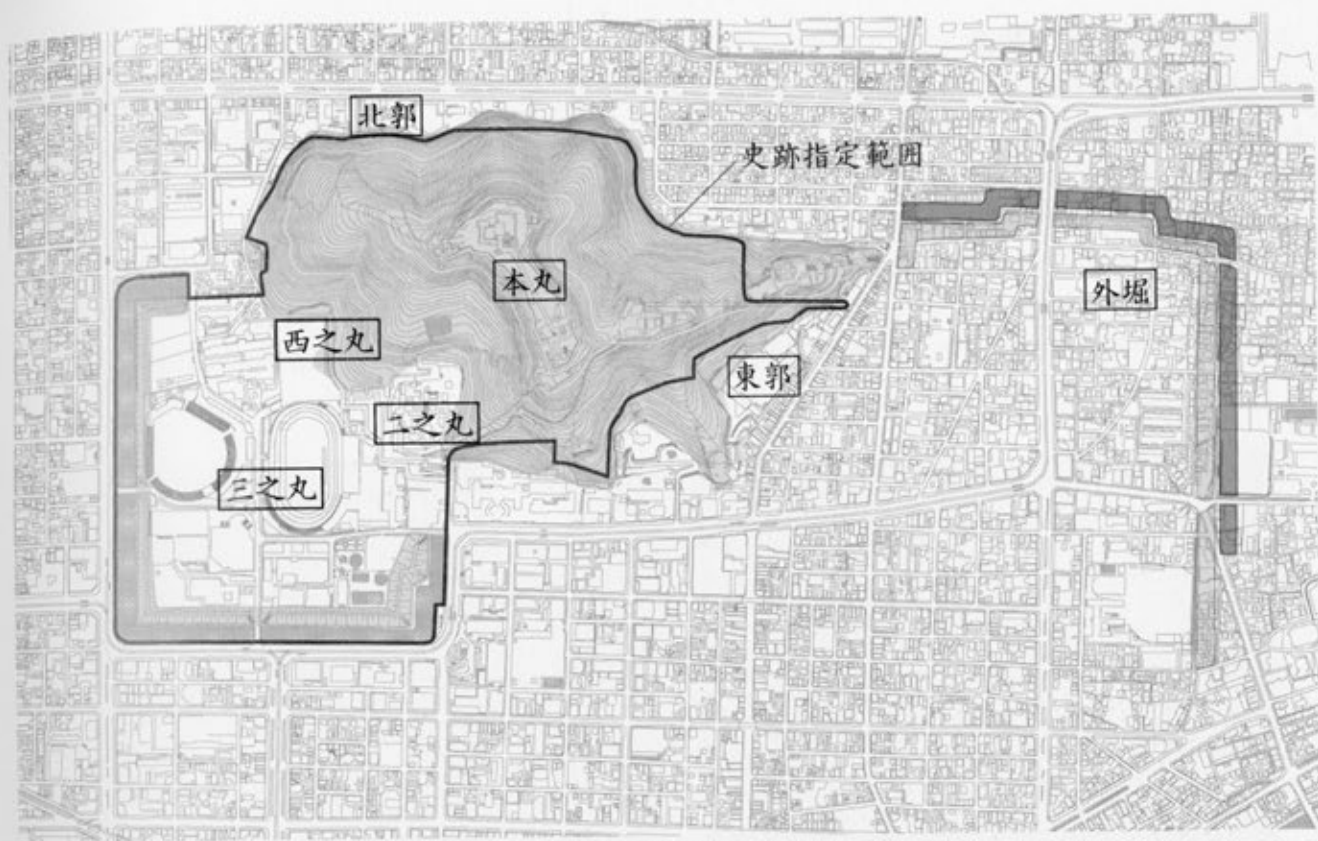


図1 松山城現況図 ※以下、全ての図は上が北



図2 龜郭城秘図（文久4[1864]年、伊予史談会蔵）※松山城編集委員会編1994の付図より転載

3. 松山城の石垣の特徴

(1) 松山城内の石垣

以上の概要を踏まえ、ここからは松山城内に見られる主な石垣について、その特長を述べる。

① 東郭

東郭周囲の石垣にのみ見られる。

勾配：緩い、直線勾配

隅角部：算木積み（一部乱れる）、角石は粗割石で不均質、角脇石は見られない

築石部：乱積み、築石は野面石及び粗割石で不均質、間詰石は小型の野面石及び粗割石
石面への調整：隅角部、築石部とも見られない



写真3 隅角部（北より）



写真4 築石部（東より）

② 本丸周辺、北登り石垣等

本丸周辺に多く、次の③と並んで、松山城で最も普遍的に見られる。

勾配：緩い、きつく反る

隅角部：算木積み、角石は粗割石で不均質（総じて長い、鱧の加工とともに不揃い）、角脇石は概ね1石を基本とし不均質、鎗角は粗割石で稜線の削り出しはないかあってもわずか

築石部：乱積み（部分的に布積み崩し）、築石は粗割石（一部野面石）で不均質、間詰石は小型の粗割石（一部野面石）を多用して大きな空隙を埋める

石面への調整：角石の稜線付近に見られるが、角脇石、築石部には基本的に見られない

備考：面が揃いととても平滑な印象



写真5 本丸周辺隅角部（東より）



写真6 本丸周辺築石部（北より）

③二之丸周辺、南登り石垣等

二之丸周辺や南登り石垣等に多く、前の②と並んで、松山城で最も普遍的に見られる。

勾配：急、反る

隅角部：算木積み、角石は粗割石でやや均質化（長さは揃うが鱧の加工は不揃い）、角脇石は1石を基本としやや均質化（方形なものが増加）、鎬角は粗割石で稜線の削り出しを行う

築石部：布積み崩し（部分的に乱積み）、築石は粗割石（ごく一部野面石）でやや均質、間詰石は小型の粗割石（ごく一部野面石）を多用して大きな空隙を埋める

石面への調整：角石の稜線付近を中心に見られる、角脇石、築石部には部分的に見られる

備考：面が揃いととても平滑な印象



写真7 二之丸周辺隅角部（南より）



写真8 二之丸周辺築石部（南より）
※手前は現代の改修



写真9 北登り石垣（②）築石部（北より）



写真10 南登り石垣（③）築石部（南より）

④本壇北側

本壇の北側を中心に見られる。本壇の東西両面で後述する⑥に切られている。

勾配：急、反るがやや直線的

隅角部：算木積み、角石は割石で精緻化（切石的、ただし鱧の加工はやや不揃い）、角脇石は1石を基本とし精緻化（切石的）、鎬角は削り出しを行い小面が伸張

築石部：布積み、築石は割石で均質化（高さ、幅が揃う）、間詰石は加工の進んだ大型の割石

が主体

石面への調整：隅角部、築石部ともに普遍的に見られる
備 考：面が揃いとても平滑な印象



写真11 隅角部（北より）



写真12 築石部（西より）
※右上部は⑥



写真13 本丸周辺（②）鎧角
（北より）



写真14 南登り石垣（③）鎧角
（南より）



写真15 本壇北側（④）鎧角
（北より）

⑤大手門西側周辺

大手門西側周辺を中心に见られる。

勾 配：急、反りは弱く直線的

隅 角 部：算木積み、角石は割石で規格化（薄く小さい方形、切石的）、角脇石は1石を基本とし規格化（薄く小さい方形、切石的）

築 石 部：布積み、築石は割石で規格化（薄く小さい方形、切石的）、そのため空隙とそれを埋めるための間詰石は著しく減少

石面への調整：隅角部、築石部ともに普遍的に見られるが粗く、石面は丸みを帯びた印象（胴張り風）に



写真16 隅角部（西より）



写真17 築石部（南より）

⑥本壇南側

本壇の南側を中心に見られる。本壇の東西両面で先述の④を切っている。

勾配：急、反りは弱く直線的

隅角部：算木積み、角石は切石、角脇石は1石を基本とし切石化

築石部：布積み、築石は切石、そのため空隙はわずかで間詰石はパネル程度

石面への調整：隅角部、築石部ともに普遍的に見られ、たいへん精緻

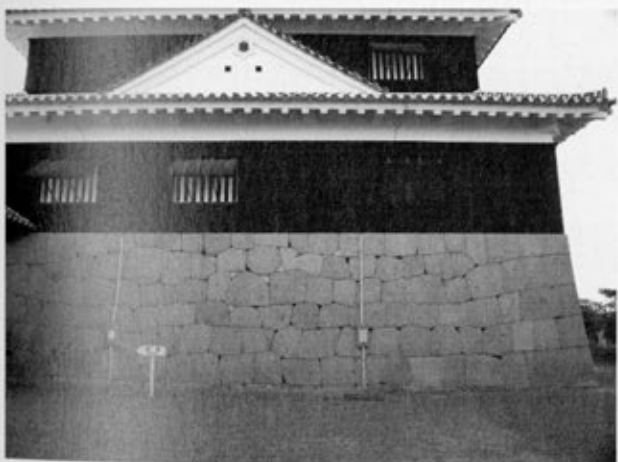


写真18 隅角部（東より）※天守台



写真19 築石部（南より）

(2)関連する他城郭の石垣

次に、上記の松山城内の石垣の年代観を考える上で指標となる、加藤嘉明が築城に関わった他の城郭石垣について、その特長を述べる。

①安骨浦倭城

文禄2（1593）年、文禄の役の際、現在の慶尚南道に脇坂安治らと構築。

勾配：緩い、直線勾配

隅角部：算木積みは成立、角石は粗割石と野面石で不均質、角脇石は見られない

築石部：乱積み、築石は野面石と粗割石で不均質、間詰石は小型の野面石や粗割石

石面への調整：隅角部、築石部とも見られない



写真20 隅角部（高瀬哲郎氏提供）



写真21 築石部（高瀬哲郎氏提供）

②名古屋城（内堀）

慶長15（1610）年から、加藤嘉明が助役普請の際に担当。

勾 配：急、反るがやや直線的に

隅 角 部：算木積み、角石は粗割石でやや均質（長さは揃うが鱧の加工は不揃い）、角脇石は1石を基本とし不均質

築 石 部：乱積み（部分的に布積み崩し）、築石は粗割石（ごく一部に野面石）で不均質、間詰石は小型の粗割石

石面への調整：角石には見られるが、角脇石、築石部には基本的に見られない（部分的なものは一部に見られる）

備 考：面が揃いととても平滑な印象



写真22 加藤嘉明担当丁場（南西より）



写真23 加藤嘉明担当丁場（南より）

③徳川大坂城（第1期、外堀）

元和6（1620）年から、加藤嘉明が助役普請の際に担当。

勾 配：急、反るがやや直線的

隅 角 部：算木積み、角石は割石で均質化（長さ、鱧の加工も揃い方形化）、角脇石は1石を基

本としやや均質化（方形なものが増加）

築石部：布積み崩し（部分的に布積み）、築石は割石でやや均質化（高さが揃う）、間詰石は加工の進んだ大型の割石が見られるようになる

石面への調整：隅角部、築石部ともに普遍的に見られる

備考：面が揃いとても平滑な印象

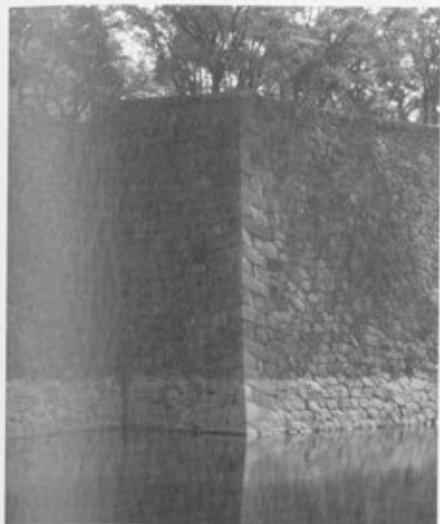


写真24 加藤嘉明担当丁場（北西より）

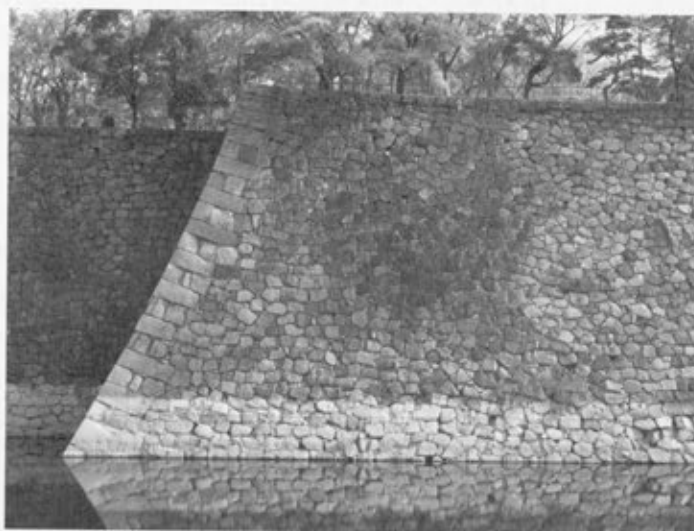


写真25 加藤嘉明担当丁場（西より）

④徳川大坂城（第2期、内堀）

寛永元（1624）年から、加藤嘉明が助役普請の際に担当。

勾配：急、反るがやや直線的

隅角部：算木積み、角石は割石で均質化（長さ、鱧の加工も揃い方形化）、角脇石は1石を基本とし均質化（方形化）

築石部：布積み（部分的に乱れる）、築石は割石で均質化（高さ、幅が揃う）、間詰石は加工の進んだ大型の割石が増加

石面への調整：隅角部、築石部ともに普遍的に見られる

備考：面が揃いとても平滑な印象



写真26 加藤嘉明担当丁場（南西より）



写真27 加藤嘉明担当丁場（西より）

(3) 松山城内の石垣の石材

松山城の石垣の石材種別は、ほぼ全て花崗岩である。丁場は未だ確認されていないが、近年松山市が愛媛大学に委託して実施した南登り石垣の石材を対象とした分析によれば、その全てが、花崗岩の中でも石手川上流域に分布する松山花崗閃緑岩である可能性が高いことが分かった（愛媛大学法文学部人文学科内田研究室編2004）。石手川は、松山城築城に合わせて、松山城の所在する勝山南側の城下町の確保と平野南部での新田開発を目的に、現在の位置に付け替えられたとされているが、元は勝山の南麓を西へ流れていたとされており、石材の運搬から考えても、この結果はたいへん理解し易いものである。なお、現在でも松山平野沿岸部では松山城の石垣とよく似た花崗岩の露頭が見られるが、これらはトーナル岩質岩帯に属しており、石垣石材とは区別されることがであった。ただし、改修に当たっては、興居島や高浜といった石手川下流の松山平野沿岸域から運んだとも言われており、また、松山城の石垣に使用された石材量が膨大であることも考え合わせると、使用頻度が低く分析対象から漏れただけの可能性もあり、現段階でこれらが全く用いられなかったとするのは時期尚早であろう。また、ごく一部含まれる礫岩は、先の分析によると勝山の和泉層群に含まれるものの可能性が高いとのことであり、これらは築城工事の際に産出し、再利用されたものであろう。



写真28 松山平野沿岸部（白石ノ鼻）
花崗岩露頭状況（東より）

4. 松山城石垣の変遷

ここからは、以上の各石垣の特徴を踏まえ、松山城内の石垣①～⑥（以下、「城内①～⑥」）の年代観について考える。

まず、そのベースとなる事実を順に確認していく。第1点目は、今回見てきた石垣を比較するにあたり、関連①の安骨浦倭城のみ石材は不明だが、他の石垣の石材は全て花崗岩であり、石材の違いによる加工への影響を考慮する必要がないことである。第2点目は、関連する他城郭の石垣①～④（以下、「関連①～④」）については、先に述べたようにそれぞれの石垣が構築された年代が押さえられており、関連①～④の順で時期が下ることである。第3点目は、これらの多くが、多数の大名が参加した天下普請であり、関連④の徳川大坂城の第2期では隅角部の整った算木積みや築石部の布積みが普遍化し、大名間の差が縮小する（なお、加藤嘉明は参加していないが、関連④の直後の寛永5（1628）年からの徳川大坂城第3期では、隅角部の整った算木積みや築石部の布積みがより徹底され、担当大名間の違いがほとんど確認できないほど斉一化する）ことから、公儀穴太の技術指導や大名間での技術交流の存在が想定されることである。その上で、第4点目として、一般的に言われているように、文禄・慶長期から元和・寛永期にかけて、勾配は急となり、反りを伴うようになるとともに、隅角部は角脇石を伴った整った算木積みへ、築石部については野面石や粗割石の乱積みから割石の布積みへ

という変化は、ここでも確認されるということである。

その上で、城内①～⑥について考えると、まず城内①は、東郭の周囲にのみ見られ、文禄2（1593）年の関連①安骨浦倭城との類似点も多く、勾配が直線勾配で、野面石が主体であること等、他②～⑥と比べて明らかに古い特徴を有していることから、松山城の築城が始まった慶長7（1602）年頃の松山城で最も古い段階の石垣と考えた。

城内②と③は、松山城の中で最も普遍的に見られる石垣で類似点も多いが、城内③の方が隅角部、築石部ともやや石材への加工が進んでおり、城内②に比べやや時期が下ると考えた。また、特に城内③は慶長15（1610）年の関連②の名古屋城との類似性が高い。これらのことから、これらは関連②と前後する、慶長中頃～元和前半頃までの時期の石垣と考えた。いずれにせよ、加藤嘉明による築城段階の典型的な石垣である可能性が高い。

城内④は、本壇北側を中心に見られ、寛永元（1624）年の関連④大坂城第2期と類似しているものの、関連④で増加する加工の進んだ大型の割石による間詰石が、関連④よりも更に目立つ点等から考えて、関連④よりも時期がやや下ると考えた。一方、この本壇は、加藤嘉明により構築された後、松平定行入封直後の寛永16（1639）年から、天守を五重から三重へ改める等、大規模に改修されたことが分かっている。また、この部分に含まれる天神櫓台の石垣は、加藤期や蒲生期と考えられる絵図（図3・4）には見られず、この松平期になってから加えられたものである可能性が高い（図5）。それらを踏まえ、この天神櫓台石垣と本壇の築石部が接する入角部を観察すると、両側の石材が交互に重なり合って積まれ（写真29）、両者が同時に施工されたこと（＝天神櫓台石垣部分だけを後補したわけではないこと）は明らかであり、城内④の石垣は、松平定行入封直後、本壇に大規模な改修工事を行ったとされる寛永16（1639）年頃の石垣であると考えられる。



図3 松山城本丸の図
（部分、加藤期、甲賀市水口図書館蔵）



図4 蒲生家伊予松山在城之節
郭中屋敷割之図
（部分、寛永4-9〔1627-32〕
年、愛媛県歴史文化博物館蔵）



図5 亀郭城秘図
（部分、文久4〔1864〕年、
伊豫史談会蔵）

※図3は若松城天守閣郷土博物館編2007より、図4は愛媛県歴史文化博物館編2008より、図5は松山城編集委員会編1994の付図より修正転載

城内⑤は大手門西側石垣にのみ見られ、隅角部も築石部も割石で規格化され（薄く小さい方形、切石的）、空隙やそれを埋める間詰め石が著しく少ない一方、石面への調整は粗く、石面は丸みを帯びている。これらの特長から考えて、寛永期よりもかなり下るものと考えられるが、この部分は、延享5（1748）年の銘のある伊豫国松山城石垣傾損之覚に、朱書きで八間半の石垣が破損した旨の記述があり（図6）、これらのことから、18世紀中頃以降に改修された石垣であると考えられる。なお、文化3（1806）年に松山藩の寺社奉行が施工したと伝えられている、西条市丹原の西山興隆寺の石垣が、石材が薄く小さく規格化され、石面への調整は粗く、石面が丸みを帯びており（写真30）、城内⑤とよく

似ていることも、この考えの妥当性を補強するものであろう。

最後の城内⑥は本壇南側に見られ、隅角部、築石部とも全て切石で、豆矢痕もわずかながら確認されるなど、城内①～⑤と比べて明らかに新しい特徴を有しており、また、先述の城内④を切って積まれている。天守等は天明4（1784）年に落雷で焼失した後、嘉永5（1852）年に再建されるが、この部分は、その再建工事に合わせて実施した石垣改修部分を示していると考えられている松山城本壇石垣修理計画図とほぼ重なっており（図7）、これらのことから、19世紀中頃に改修された石垣であると考えられる。



写真29 本壇天神櫓台石垣入角部（南東より）



図6 伊豫国松山城石垣傾損之覚
（部分、延享5[1748]年、松山市役所蔵）



写真30 西山興隆寺石垣（南東より）

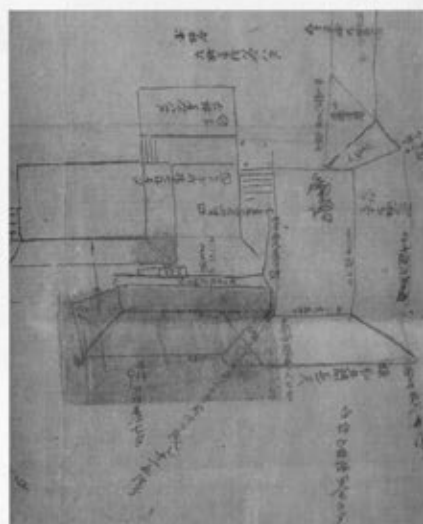


図7 松山城本壇石垣修理計画図
（部分、近藤・豊島家文書）

※図7は、松山市史編集委員会編 1988の付図を修正転載

以上をまとめると、城内①～⑥はその順で年代が下り、城内①～③が加藤嘉明による17世紀前半の築城段階、城内④～⑥は松平期で、城内④が17世紀中頃、同⑤が18世紀中頃、同⑥が19世紀中頃と考えられる（表2）。

石垣種別	勾配	隅角部				鑄角部	築石部			時期		
		積み方	角石		角脇石		築石	間詰石				
			石材種別	表面調整				数・傾向	表面調整		石材種別	表面調整
関連① 安骨浦倭城	緩 直線勾配	(算木積み)	粗割石 野面石	×	×	×	?	乱積み	野面石 粗割石	×	野面、粗割石	文禄2 (1593)
城内① 東郭	緩 直線勾配	算木積み (一部乱れる)	割石	×	×	×	—	乱積み	野面石 粗割石	×	野面、粗割石	慶長7～ (1602～)
城内② 本丸周辺 北登り石垣	緩 強く反る	算木積み	粗割石 (長・幅とも 不揃)	稜線付近 のみ	×	(1)・粗割石 不均質	×	乱積み (一部布積み崩し)	粗割石 野面石	×	粗割石 (面が揃い平滑な印象)	慶長中頃～ 後半
関連② 名古屋城	急 反る	算木積み	粗割石 (やや規格化)	普遍的	×	1・粗割石 やや均質	×	乱積み (一部布積み崩し)	粗割石 (野面石)	×	粗割石 (面が揃い平滑な印象)	慶長15～ (1610～)
城内③ 二之丸周辺 南登り石垣	急 反る	算木積み	粗割石 (長揃、幅揃)	稜線付近 を中心	×	1・粗割石 やや均質	×	布積み崩し (一部乱積み)	粗割石 (野面石)	×	粗割石 (面が揃い平滑な印象)	慶長後半～ 元和前半
関連③ 徳川大坂城 第1期	急 反る (やや直線的)	算木積み	割石 (規格化)	普遍的		1・割石 やや均質		布積み崩し (一部布積み)	割石	普遍的	加工された大型割石が 出現 (面が揃い平滑な印象)	元和6～ (1620～)
関連④ 徳川大坂城 第2期	急 (やや直線的)	算木積み	割石 (規格化)	普遍的		1・割石 均質		布積み (一部布積み崩し)	割石	普遍的	加工された大型割石が 増加 (面が揃い平滑な印象)	寛永元～ (1624～)
城内④ 本壇北側	急 反る (やや直線的)	算木積み	割石 (切石的)	普遍的		1・割石 (切石的)		布積み	割石 (切石的)	普遍的	加工された大型割石が 主体 (面が揃い平滑な印象)	寛永16～ (1639～)
城内⑤ 大手門西側	急 弱く反る (直線的)	算木積み	割石 (切石的) ※薄+小	普遍的 (粗い)		1・割石 (切石的) ※薄+小		布積み	割石 (切石的) ※薄+小	普遍的 (粗い)	空隙・間詰石とも 著しく減少	延享5～ (1748～)
城内⑥ 本壇南側	急 弱く反る (直線的)	算木積み	切石	普遍的 (精緻)		1・切石		布積み	切石	普遍的 (精緻)	空隙わずかでパネル程度	嘉永元年～ (1848～)

表2 松山城及び関連城郭の石垣について (まとめ)

5. おわりに

以上、松山城の石垣の特徴とその変遷について、試案を述べてみた。松山城の石垣は膨大で、まだ加えるべき石垣はいくつもあるように思われるだけでなく、石垣の測量がまだ途中段階であることや、文献・絵図等の悉皆調査といった基本的な作業が行われていないこと、また、筆者自身の不勉強もあり、この試案は、形式的・定性的な側面を中心とした、決して十分と言えるものではない。しかしながら、今まで松山城の石垣についてはまとまった研究がなされておらず、今後の研究の叩き台は提示できたのではないかと考えている。

そのため、このような段階で松山城の石垣の変遷の要因について、結論めいたことを述べるのは次期尚早だが、現段階では、全国的な近世城郭の石垣の変遷と、松山城の石垣の変遷が概ね一致することや、加藤家、蒲生家に続く松平家の230年を越える治世の間でも石垣の積み方が大きく変化していることから、大名の交替の影響等よりは、時代や流行の変化、それに伴う職人の技術の変化の影響が主であろうと考えている。ただし、これは、先にも少し触れたが、一国一城令や武家諸法度等で城普請が大きく減少する中で、主に天下普請等の影響で全国的に技術が均質化する寛永期以降の話であり、城普請の盛んな元和期までは、全国的にも大名間（その配下の職人間）での差は大きい。例えば、元和期までの前田家の金沢城や前田家が担当した天下普請の丁場と、加藤嘉明の松山城や加藤嘉明の担当した天下普請の丁場とでは、これは加藤嘉明に限らず秀吉恩顧の西国大名に概ね共通することだが、特に築石部の石積みは、加藤嘉明をはじめとする西国大名の方が特段に平滑であり、布積みへの志向等とともに、そこには明瞭な差異が見受けられる。また、全国各地の近世城郭で見られるように、江戸時代を通じて、石材の違いは、石垣に決定的な影響を与え続けており、その差異の最大の要因であり続けることも忘れてはならない。

四国には、たいへん個性的な近世城郭、石垣がまだ数多く残されている。今後は、今回の松山城をベースに対象を順次広げるとともに、それらを踏まえて、より広い視野での金沢の石垣の位置づけについて、述べられるよう努力していきたい。

(参考文献)

- 足立重信公三百五十年祭実行委員会編 1974 『足立重信と松山』松山市役所
伊豫史談会 1930 『加藤嘉明公』松山市役所
愛媛大学法文学部人文学科内田研究室編 2004 『松山城登り石垣調査報告書』
2007 『松山城登り石垣調査報告書Ⅱ』
愛媛県歴史文化博物館編 2008 平成20年度特別展図録『掘り出されたえひめの江戸時代ーくらし百花繚乱ー』愛媛県歴史文化博物館
北垣聡一郎 1987 『石垣普請』法政大学出版局
児玉幸多・坪井清足監修 1980 『日本城郭体系 第16巻 大分・宮崎・愛媛』新人物往来社
東雲書店 1981 『郷土古資料集(一) 松山古地図』
松山城編集委員会編 1994 『松山城 増補5版』松山市観光協会
松山市史編集委員会編 1988 『松山市資料集 第13巻』松山市役所
1993 『松山市史 第2巻』松山市役所
1995 『松山市史 第5巻』松山市役所
三浦正幸 1999 『城の鑑賞基礎知識』至文堂
森田克行 2000 「城の石垣」『考古学による日本の歴史 6 戦争』135-146頁 雄山閣
柳原多美雄 1966 「松山城の築城について」『伊豫史談 182号』1-4頁 伊豫史談会
若松城天守閣郷土博物館編 2007 平成19年度夏季企画展図録『戦国武将 加藤嘉明』(財)会津若松市観光公社